

2020年8月30日(日)礼拝説教要約

説教「十字架へと進み行く主イエス」

(ヨハネ福音書18章1～11節)

ヨハネ福音書は、今日から18章に入ります。ヨハネ福音書は13章から16章までが、十字架を前にした最後の晩餐の席でのイエス様の最後の教えが記され、17章ではイエス様の最後の祈りが記されていました。18章は、いよいよイエス様が逮捕され、尋問を受ける場面が描かれています。

今日の場面、18章1～11節にはイエス様が逮捕される場面が描かれています。

今日は、この場面から3つのメッセージをお伝えして参りたいと思います。

第一のメッセージは何か。それは、イエス様が自ら進んで十字架に向かわれたということです。1節・2節によると、イエス様と弟子たちはキドロン谷の向こう、つまり、オリーブ山の麓にあるゲッセマネの園に行かれました。

その場所はイエス様を裏切ったユダも知っていました。そして、ユダが兵士たちを引き連れてそこにやってくることをイエス様はご存知でした。つまり、逮捕されることを知りながらイエス様はそこに向かったのです。

しかも、イエス様はご自分を捜しに来た兵士たちに向かって「わたしである」とおっしゃった。「私である」と言う表現は、ヨハネ福音書ではイエス様が神の子、いや神であることを示す表現です。実際、イエス様が「私である」とおっしゃると、捕らえに来た一人が後ずさりして地面に倒れたと言います。

そのようにイエス様は、自分であることを明言され、逃げることなく堂々と力強く十字架に向かわれたのでした。

それはなぜか。十字架が神から与えられたご自分の使命であることを知っておられたからです。そして、人間の罪をいやというほど知っておられたからです。ご自分が十字架に架かる以外に人間の罪が赦される道はないことを十分ご存知であった。だから、イエス様は自ら十字架に進み向かわれたのです。

第二のメッセージは何か。それは、イエス様は私たちを最後まで命を懸けて守ってくださるということです。

イエス様は「私を捜しているのなら、この人々を去らせなさい」と言われました。私を捕らえていいが、弟子たちを逃してほしいと言われたのです。

「それは『あなたが与えてくださった人を私は一人も失いませんでした』という言葉が実現するためであった」といいます。つまり、イエス様は、一人も失うことなく命がけで守ってくださる方だと言うのです。

ある人は「これは、神に向かって叫んでいる言葉である」と書いています。つまり、イエス様は神様の裁きからも守ってくださる言うのです。罪人の私たちは神の裁きに耐えられせん。その私たちに代わって、イエス様が十字架上で神の裁きを受けてくださった。これが十字架の本当の意味だと言っていいでしょう。イエス様は、神様の裁きからも私たちを守ってくださるのです。

第3のメッセージは何か。それは、神様の御心・ご計画を私達人間は変えられないということです。

弟子のペテロは、イエス様を捕らえに来た人に剣を抜いて切りかかりました。これは神のご計画に逆らう行為でした。

人は神の御心・ご計画に逆らうことができません。イエス様は「父がお与えになった杯

は飲むべきではないか」と言って十字架へと向かわれました。主は神の御心に最後まで従われたのです。主は、神の御心に最後まで従う生き方を身をもって示してくださったのです。

2020年8月30日(日)礼拝説教抄(説教本文から)

「私たちは、神様の御心・ご計画をなかなか受け入れられないことがあります。特に、神様の御心・ご計画は、時に大きな苦しみや深い悲しみ・辛さが伴うことがありますので、それはなかなか受け入れられません。

『なぜですか。なぜ、こんなに苦しまなければならないのですか』と訴えるしかありません。私達は、その神の御心・ご計画を受け入れられず、それに抵抗し拒否しようとするのです。

しかし、私達がそれに抵抗し、拒否しようとするほど、むしろ、苦しみと悲しみ、辛さは増して行くばかりです。

全長・数百メートルの大きな船、排水量・重量が数万トンという巨大な船が目の前に立ちはだかっている。この大きな船を小さな船に乗った私たちがこちらに引き寄せようとして、その船にロープをかけて引き寄せようとしても、私達は、どうてい引き寄せることはできません。むしろ大きな船の方に引っ張られるだけです。ペテロが剣を抜いて切り

かかったと言うのはそういうことです。

神様のご計画というものは、私達が動かせるようなものではありません。

私たちは、神様のご計画を自分の力で動かすことよりも、むしろ、心を静め冷静になり、祈りの中で神の御心・ご計画を深く思い、神の御心がどこにあるのかを見極め、神への深い信頼をもって、神の御心・ご計画に身をゆだねるしかありません。

神様は必ず、私達を最善の道へと導いてくださるはずです。なぜなら、神様は、私達をご自分の意思でこの世に生まれさせ、今日まで生かしてこられた父であり、その独り子・イエス様の尊い命を与えるほどに私達を深く愛しておられるお方だからです。

ここでイエス様は、『父がお与えになった杯は飲むべきではないか』とおっしゃっています。『飲むべきではないか』というのは、『どうして飲まずにいられようか』ということであり、『飲まないということは、あり得ない』ということです。

イエス様は『この世のすべての人を救い出す』という父なる神様のご意思・ご計画を深く理解し、そして、父なる神への深い信頼をもって、それを受け止め、そのご計画に従って十字架へと向かわれたのです。

イエス様のご受難というのは、ある時、偶然に起こったものではありません。あるいはまた、当時の人間が、たまたま引き起こした出来事と言うものではありません。それは、神の御心であり、ご計画であったと言うほかありません。イエス様は、そのことを誰よりもご存じであった。だからこそ、その苦き杯を飲まれたのでした。

私達は、このペテロのように、一時的な思いや感情で物事を判断し、軽率な言葉を

語り、軽率な行動を取ってしまう愚かな者です。しかし、私たちには、イエス様のよう
に神様を深く信頼し、神様の御心・ご計画に従って歩むことが求められます。そのこと
が必ず、私たちに、また、私たちの周囲に、そして、この世界全体に、恵みと祝福、幸
福をもたらすことを知らされるのです。

今日、見てきましたように、イエス様は、十字架に向かって自ら進んで行かれました。
それは、神様のためであり、また、私達のためでありました。

私たちは、そのイエス様の心の奥に燃えている、父なる神への深き信頼と服従を、ま
た、わたしたちへの深き愛を、しっかりと受け止めて行きたい。

そして、私たちもまた、神様から一人一人に与えられている使命に向かって、主と共
に歩んで参りたい。そう思うのです。」